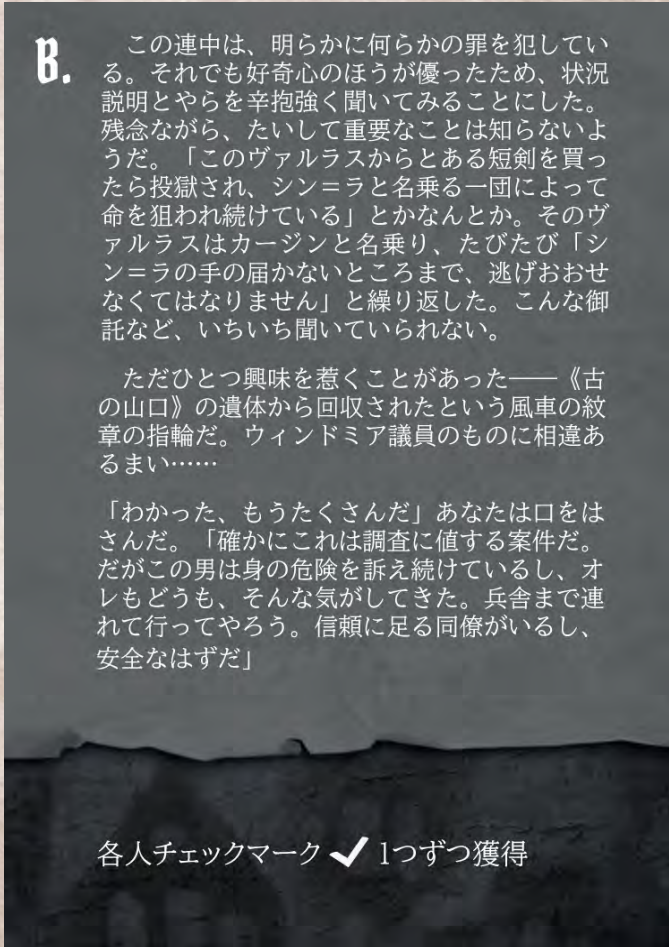
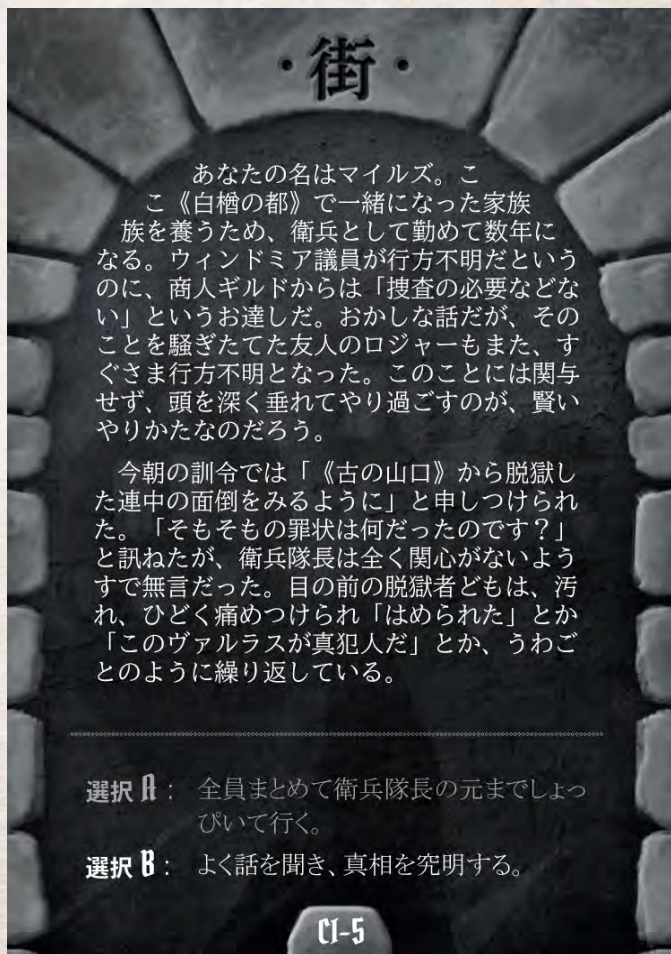


前のシナリオの結末は？

① 終幕 A

② 終幕 B



開始条件：なし

目的：街の全衛兵と全射手を、説得するか倒す

序幕：

「よい考えとは思えませんな」兵舎へと引きずられながら、カージンがこぼした。「この街の衛兵隊は、信ずるに足りません！」

「口を慎むがいい！」マイルズは肩越しにそう叫びつつ、賑やかな通りを先導した。「オレだって考えてるつもりだ。公共の場にいる限り、シン＝ラの野郎どもだって手出しはできない。あいつら、うまく痕跡を隠してるつもりだろうが、工作が多すぎる。全部を隠し通すことなんて、できやしないんだからな」

これが初めてということもない。確かに「蛇の策」は、さほど人通りの多くない地域でおこなわれた。マイルズが正しいことを祈りたい。だがそのとき屋根の辺りから一本の矢が飛来し、カージンの背に突き刺さった。

「うぐっ！」うめいて倒れる。諸君は駆け寄り、カージンを引っ掴んで先を急がせた。だが傷は浅くはない。建物の上部を探る。矢がどこから来たのか、見当もつかない。すぐに二の矢、三の矢が飛んでくるだろう。

「歩みを止めるな！」マイルズが言った。「兵舎までは、さほど遠くない。市場の出店を盾に、進み続けるんだ！」

果たして後続の矢が放たれたが、他に誰も負傷には至らなかった。数分後、兵舎に駆けこみ、背後の扉をピシャリと閉めた。部屋の中央には、衛兵隊に囲まれて豪華な鎧を着こんだ男がいた。

「え、衛兵隊長殿！」マイルズはどもった。「まさか昼日中のこんな時分に、ここに居られるとは……」

「ああ、こんなところになど居たくはなかったさ。だが、マイルズ。お前さんが、とんでもない連中とつるんでると、通報があつてな」隊長は続けた。「お前さんは法を破り、この犯罪者どもの手助けをしている。なら、お前さんふくめこの全員を収監せねばなるまい」

「隊長殿ともあろうおかたが、なにをバカげたことを！」マイルズが言い返した。「何かが起こっているのです。オレはその真相を究明すべく、衛兵としての務めを果たしているだけ！」



使用する
地形タイル：

Gib
Lia
Nib



他の衛兵たちは口々に意見をもらしつつ、有事に備えて足を動かし始めた。だが隊長は片手を上げ、いさめた。

「よからう！ お前さんには、お前さんの務めがある。この連中に手枷をはめて《古の山口》まで護送するのだ。こちらにも出席せにゃならん別件があるからな」

言いながら、隊長は脇の出口へと向かった。そこで何頭かの番犬の鎖を外し、かまちを潜った。「どんな手段を使ってでも、その脱獄者どもを制圧するのだ。この私を失望させるなよ」

マイルズはこちらに引き直った。「オレに説得する時間をくれ」そして続けた。「こいつらは信頼に足る戦友だ。オレの話をきちんと聞いてくれる。オレが真実を伝えるあいだ、なんとか防いでいてくれ」

そういうことなら手早く済ませてほしいものだ。いまのところ他の衛兵はやる気満々のようだし、カージンの血で床が赤く染まっていく。

特別ルール：

ヘクス **a** に、番号があるシナリオ補助トークンを1枚配置してください。これはマイルズで、パーティの仲間であり、他の全モンスターの敵です。装甲 **1** で、HPは通常の街の衛兵の2倍です。マイルズが倒れたら、パーティはこのシナリオに敗北します。

マイルズは毎ラウンド行動順位49で、通常の狙いのルールにしたがって、街の衛兵もしくは射手1体を狙いつつ「移動3」を実行します。マイルズが狙いに隣接したら、狙いのスリーブの該当箇所、番号があるシナリオ補助トークンを「説得トークン」として1枚配置してください。説得トークンが1個か2個あるモンスターは気絶 **◆** 状態とみなし、手番で何の行動もできません。説得トークンが3個になったモンスターは、寝返ってパーティの仲間となり、もはや気絶 **◆** 状態とはみなされません。パーティ側に寝返った街の衛兵もしくは射手は、他の街の衛兵&射手にとっては仲間のままですが、恐狼には敵となります。

第3～6ラウンド終了時、**b** に恐狼が1体発生します。キャラクター2人ゲームなら通常の、3人なら奇数ラウンドには通常の偶数ラウンドには上級の、4人なら常に上級の恐狼です。

第7～10ラウンド終了時、キャラクター2人ゲームなら **b** に恐狼（上級）が1体、3人ゲームなら **b** に恐狼（上級）が1体 **c** に恐狼（通常）が1体、4人ゲームなら **b** と **c** に恐狼（上級）が1体ずつ発生します。

第11ラウンドからは、キャラクター2人ゲームなら **b** に恐狼（上級）が1体 **c** に恐狼（通常）が1体、3人ゲームなら **b** と **c** に恐狼（上級）が1体ずつ **a** に恐狼（通常）が1体、4人ゲームなら **b** と **c** と **a** に恐狼（上級）が1体ずつ発生します。

敵である街の衛兵&射手がいなくなったら、このシナリオは成功裏に完遂となります。

終幕：

多くの衛兵が負傷で地に倒れ伏した。立っているものは、例のヴァルラス含め負傷者に応急処置を施してまわった。マイルズが味方になってくれたのだから、ここにいる全衛兵は、いずれ諸君の事情をきちんと理解してくれることだろう。

使える資材を集め、兵舎の入口にバリケードを築いた。人殺しの怪物どもに邪魔されないうちに、しばしの休息と次なる計画の立案をしよう。

報酬：

各人、マップ上に残った街の衛兵および射手の合計数の5倍のXP獲得。

この、マップ上に残った街の衛兵および射手の合計数を記録しておくこと。

マップ上に残った街の衛兵と
射手の合計数：

- ① 0人
- ② 1人
- ③ 2人
- ④ 3人
- ⑤ 4人
- ⑥ 5人
- ⑦ 6人
- ⑧ 7人

カーズンが負傷から回復したと見るやいなや、諸君とマイルズは、詳細を話すようにと詰め寄った。

「まあ、ときには盗品を扱うことだってあります」カーズンは認めた。「たいていは大した問題にはなりません——出所なんか隠せませうからね——ところがあの短剣は違った。常連客のひとりから買い取ったものですが、こいつが大問題だ。

初当選のジェリック議員の居室からくすねたそうです。当てがわれた新たな部屋に、充分な警備体制が敷かれる前に、盗んだというわけです。ところがその柄には、黒い液体の瓶が仕込まれていた——シン＝ラだけが使う特別な毒でした」

「そういえばジェリックは、ウィンドミアの後釜に座ったんだ！」マイルズが喘いだ。「なるほどシン＝ラは、商人上院議会の議員を暗殺し、自分たちの仲間を送りこんでいたというわけか！」

「それは確かにそうかもしれませんが」カーズンは続けた。「しかし同時に考慮すべきは、我々がこの秘密を知ってしまったという事実

です。口封じのためなら、シン＝ラは手段を選ばないでしょう。既にあの衛兵隊長は陥落していますし、秘密隠蔽のためなら、無辜の市民を何人犠牲にしてもいいと考えている。早くこの街から出るべきです。例の常連客からきいた話では、グルームヘイヴンならシン＝ラの影響力はさほどでもないそうです。あそこなら生き延びることができる」

「逃げるだと？」マイルズは鼻で笑った。「バカバカしい！ こんな秘密を抱えたまま、逃げおおせるなんてできっこない！ オレたちはこの街の存亡に関わる話をしてるんだ。留まって戦うべきだね！」

「おやおや、皆さんはどんな輩を相手にしようとしているのか、わかっておられないらしい」カーズンは溜息をついた。「確かに皆さんは全員優秀な戦士でしょう。けれどまだシン＝ラの本気を目にしたことはない。だいたい今この時点で、いったい何人の議員にシン＝ラの息がかかっているのか、わかっていないのですよ。真の意味での物証もない。どうやって正体を暴くおつもりで？ 私にも、皆さんを街の外まで無事に送り出す力ぐらいあります。それ以外に、生き伸びる道はありませんよ」